



独立行政法人福祉医療機構 平成 23 年度社会福祉振興助成事業 「訪問介護員と福祉用具専門相談員の連携研修」スタート！ ～神奈川県会場（横浜市）・千葉県会場（船橋市）から全国へ～

本会が主催する「訪問介護員と福祉用具専門相談員の連携研修」が始まった。この研修は、独立行政法人福祉医療機構の平成 23 年度社会福祉振興助成事業として行われるもので、事業名は“福祉用具の事故防止を視点とした技術・連携研修事業”。神奈川県、千葉県、静岡県、大阪府、鹿児島県の5府県で行われる。

第1弾は、2011年11月14日（月）神奈川会場。社団法人日本福祉用具供給協会 南関東支部 神奈川県ブロックの協力のもとで開催された。第2弾は、2011年11月25日（金）千葉会場。千葉県在宅サービス事業者協議会の協力のもとで開催された。

両日とも、丸一日のハードスケジュールだったにも関わらず、熱心な受講者に、活気あふれる研修会となった。

2012年4月、個別援助計画の作成義務化 介護保険制度における福祉用具のステージの新たな幕開けに向けて

高齢者数が増加するにつれ、福祉用具の利用者数も増加傾向にある。より多くのご利用者が、生活の中の“自立”を実現できているとしたら、それは大変よろこばしいことだ。しかし、その一方で福祉用具の事故が社会的関心を集めているという現実を見過ごしてはならない。福祉用具に関わる事故防止、安全に利用できる環境づくりのキーワードが「リスク管理」であり、各専門職の共通認識、連携が欠かせない。



2011.11.14（月）神奈川会場 ウィリング横浜（神奈川県横浜市）
参加者は、訪問介護員 26 名と福祉用具専門相談員 25 名。



2011.11.25（金）千葉会場 クロスウェーブ船橋（千葉県船橋市）
参加者は、訪問介護員 14 名と福祉用具専門相談員 20 名。

日頃、ご利用者には同様に近い距離で接しているにも関わらず、実際のサービス提供場面では意外に関係の薄い福祉用具専門相談員と訪問介護員。両職種のケアマネジメントの過程における連携を目指すというのが、本事業の主題である。訪問介護計画と福祉用具個別援助計画を通じてお互いの業務を理解し、連携方法を検討し合うとともに、主に福祉用具の利用についての注意点を演習形式で学ぶ。

“ヒヤリ・ハット”という言葉に注目したい（言葉自体は目新しいものではないが）。福祉用具を利用して、事故にまではいかなかったが、事故になってもおかしくない状況をどう意識し対応するか。本来、福祉用具専門相談員でここに鈍感な者はいないだろう。しかし、決定的に残念なことは、福祉用具専門相談員が、日常生活でご利用者がその福祉用具を利用している現場を見る機会が非常に少ないということだ。最も近くにいるのは、生活の現場にいる家族か、訪問介護員。今回の研修の目的がここにある。

「2012年4月から福祉用具についての個別援助計画作成の義務付けがほぼ決定しました。今までにもケアカンファレンスなどを通じ、福祉用具専門相談員と連携することが多少はあったと思いますが、個別援助計画書がサービスの提供現場でスタンダードとなることによって、本格的な多職種連携の時代が到来します。サービスの種類ごとにではなく、関連各職が全体的に大きく向上し、リスク管理の面からも大きく変化するきっかけとなるのではないのでしょうか」（山下氏）。



山下 一平 氏
（やました・いっぺい）
（社）全国福祉用具専門相談員
協会理事長

福祉用具の「リスク管理」に必要な体制とは？ 事故を未然に防ぐのはモニタリングと関連職間の連携

講義：適切なモニタリングの実施と職種間の連携による事故予防

◇福祉用具は安心・安全な生活にこそ必要◇

「福祉用具を使う場合の安全・安心が今日のテーマの1つですが、福祉用具を使わない方が危ないということもあります。まずは、安全・安心のために福祉用具を活用しましょう」とは神奈川で講義を担当した渡邊氏。

福祉用具は、安全・安心に寄与することが大前提であり、慎重に使うという気持ちは大切だ。しかし、それに偏らず積極的に取り入れることも大切で、その過程でのリスク

千葉会場



山本 一志 氏
(やまもと・かずし)
(社)全国福祉用具専門相談員
協会事務局長

マネジメントに取り組むために必要となるのが、そこに関わる専門職の連携なのである。

千葉の講義を担当した山本氏も、その点を今回の合同研修の目的の中の1つに挙げている。

◇合同研修の4つの目的◇

今回の合同研修の目的は次の通り。

- ①福祉用具を使用する方が（使用しないより）、ご利用者、ご家族双方に安全・安心であることを再認識する。必要な注意さえ怠らなければ、福祉用具を使わない方が、より危険。
- ②訪問介護員は、使用状況の確認とともに使用方法を指導するという意識を持つ。
- ③福祉用具専門相談員は、訪問介護員の視点で福祉用具選定の再評価ができるようになる。
- ④個別援助計画書で①～③の橋渡しを行うというプロセスを、お互いに理解する。

④の個別援助計画書（個別サービス計画）については、訪問介護員にはまだなじみがないだろう。作成するのは福祉用具専門相談員だが、その内容とそれに続くモニタリングをより効果的で充実したものにできるかは、訪問介護員との連携にかかっているといっても過言ではないのだ。

訪問介護員にとっても、個別援助計画書の内容を正しく読み取ることが、何の目的で、何を基準に導入された福祉用具であるのかを理解することにつながる。



▲個別援助計画書の内容に興味津々の訪問介護員（横浜会場）

ご利用者のニーズを知るとともに、訪問介護の現場で、どんなこと

に注意して使うべきか、何をチェックすべきかを把握できるのだ。

◇介護現場の“ヒヤリ・ハット”◇

山本氏によると、製品安全協会調査の生活上の「ヒヤリ・ハット」については、介護者 40.6%、被介護者 30.7%と、介護者の方が多く感じているという。屋外よりも部屋の方が多く、浴室よりも寝室での立ち上がり動作などに転倒についての「ヒヤリ・ハット」は多い。

「これは現場に出られている皆さんはよくわかりだと思います。足もとが不安定なための転倒など、特別な動作ではないところで『ヒヤリ・ハット』は多くなります」（山本氏）。

また、福祉用具専門相談員にとって悩ましいのは、入浴やトイレなど具体的に試してもらうのが難しく、評価を直接に感じられない福祉用具の提供だという。

「使用時に身近にいる訪問介護員の方に、ぜひ情報をいただきたい」（同氏）。

◇生活上のリスクマネジメント◇

福祉用具を使っている場合でも、日常生活には様々なリスクがある。渡邊氏は言う。

「『ここがあぶないんじゃないか』という視点を持つことが大切。一歩引いた目でみることに。特に福祉用具を導入するということは

神奈川会場



渡邊 慎一 氏
(わたなべ・しんいち)
(社)神奈川県作業療法士会
会長

状況を変えること、生活動作を変えることですから、そのために生じるリスクと全体的にみた場合のリスク、両方をみる目が必要です」。

ポイントは、ご利用者と環境、介護の3つの視点。いろいろな職種がそれぞれの目でみると様々なリスクに気づく。気がついたら言語化して情報を共有すること。そしてプロとしては、その対策となるような注意点をはっきり示すことも必要だろう。それをもって「リスクマネジメント」といえるのではないだろうか。

「ケアマネジメント・プロセス、福祉用具サービス・プロセス、いずれもモニタリングが重要なのですが、ここのポイントは、モニタリングの際に重要なのが介護者の視点だということ。福祉用具専門相談員の方も意識することが大切です」（同氏）。

演習 I : グループ別の福祉用具安全確認トレーニング

◇ 福祉用具を安全に使用するには ◇

山田氏によると、福祉用具を利用するにあつての大きな注意点は4つ。

①ご利用者の環境は千差万別。

バリアフリーで整った環境のご利用者もいれば、古い木造家屋で段差が非常に多い環境の人、畳の部屋で車いすを利用している人もいます。

②選べる福祉用具は多種多様。

多くから選んで提供できるということで、合わない福祉用具は取り換える、ご利用者に説明できる、という責任が福祉用具を提供する側にも必要である。

③ご利用者も介護者も福祉用具に不慣れである。

絶えず見直し、福祉用具の変更を行うことによって、不慣れな用具を使うという場面が増えてしまうかもしれない。ご利用者の理解力に合った説明をする必要があり、不慣れや無理解が原因となる事故は防がなければならない。

④福祉用具の使用経験に個人差が大きい。

◇ 福祉用具安全確認トレーニング ◇

[グループワーク]

6～8人のグループ。構成は、福祉用具専門相談員と訪問介護員が半々。

(1) 「どんな危険がひそんでいますか？」

課題の絵を見て危険なところをあげる (15分)
根拠を明確にして具体的に
「～なので～する可能性がある」

(2) 「どんな安全確認・対策が必要ですか？」

(1)の結果について対策をあげる (15分)

(3) グループごとに発表

- ・重点課題 (自分たちにとって重要な項目を1つ)
- ・スローガン (自分たちの行動目標)

神奈川会場 千葉会場



山田 誠 氏
(やまだ・まこと)
(社) 全国福祉用具専門相談員協会

各グループごとに、課題シートについてディスカッションを行った。神奈川会場、千葉会場ともに、訪問介護員と福祉用具専門相談員がそれぞれの視点から意見を出し合い、活発に意見が飛び交った。

15分ずつ区切って(1)(2)それぞれをまとめるというメニューだったが「時間が足りない」という声しきり。山田氏が進行に苦心するほどの盛り上がりを見せた。

各事例における「ヒヤリ・ハット」のポイントや対応・解決策については、どのグループもほぼ出そろったが、印象的だったのは両会場とも、訪問介護員の視点からの細かい気配りがみえたことだ。「福祉用具に関わらず、全体的に注意していますね。ご利用者の状態や介護の状況などから、気づいたこともたくさんありました」(山田氏)。

*参加者の感想は…

- ・普段はカンファレンスでしか接点がないので、違う視点からの意見が参考になった (訪問介護員：サービス提供責任者)
- ・ヒヤリ・ハットでは視点の違いを感じた。自分たちは福祉用具自体のことをみるが、ヘルパーさんには、ご利用者の目線からの“気づき”がある (福祉用具専門相談員)



福祉用具安全確認トレーニング 状況シート
シート No.07

用具：車いす (シャワーチェア)
動作：移動
場所：浴室

状況説明 ※実際に基づいて作成しています。
シャワーのため浴室に入ろうとしている。

課題
▶▶ どんな危険がひそんでいますか？
▶▶ どんな安全確認・対策が必要ですか？
(安全) 人・用具・環境に留意する必要があります。

福祉用具安全確認トレーニング 状況シート
シート No.08

用具：車いす
動作：歩行
場所：散歩 (下町)

状況説明 ※実際に基づいて作成しています。
散歩していたら、坂道で買い物友人に会った。

課題
▶▶ どんな危険がひそんでいますか？
▶▶ どんな安全確認・対策が必要ですか？
(安全) 人・用具・環境に留意する必要があります。

福祉用具安全確認トレーニング 状況シート
シート No.09

用具：介着用ベッド、ボータルトイレ
動作：立ち上がり
場所：居室

状況説明 ※実際に基づいて作成しています。
ボータルトイレで排泄するため、介着用ベッドから立ち上がろうとしている。

課題
▶▶ どんな危険がひそんでいますか？
▶▶ どんな安全確認・対策が必要ですか？
(安全) 人・用具・環境に留意する必要があります。

福祉用具安全確認トレーニング 記入シート

シート No.10

1 どんな危険がひそんでいますか？
2 どんな安全確認・対策が必要ですか？

重点課題 (自分たちにとって重要な項目を1つ)
スローガン (自分たちの行動目標を1つ)

演習Ⅱ：グループ別に福祉用具の事故予防を視点とした事例検討

◇具体的な事例に基づき 福祉用具の使用環境を検討◇

演習Ⅱは、具体的な事例に基づいて、福祉用具の選定や使用環境を含めた事故予防についての検討を行った。事例タイトルは「在宅復帰への環境整備」。

グループワークの手順は次の通り。

- ①事例説明（30分）
利用者基本情報や、課題（ニーズ）、居宅サービス計画書、間取り図、福祉用具個別援助計画書
- ②訪問介護員と福祉用具専門相談員それぞれでの意見出し（10分）
- ③訪問介護員と福祉用具専門相談員相互の意見出し（10分）
- ④グループ内での事例検討：安全確認トレーニング（25分）
- ⑤訪問介護員と福祉用具専門相談員それぞれで留意点の書き込み（30分）
- ⑥グループ発表および総括（30分）

「事例検討会ではないので、どんなことが考えられるかということに注意して進めてください。福祉用具専門相談員と訪問介護員、それぞれの視点での意見出しでは“専門性”を発揮すること」（助川氏）。

この演習の目的は2つ。それぞれの専門性にもとづく留意点を互いに理解することと、他の専門職に伝わる留意点等の書き方をすることである。現場では、この“伝わること”が重要だ。これについて、内田氏からは「サービス提供責任者であれば、事業所のヘルパーさんに“伝わる”ことを意識して書いてください。例えば“～に注意する”では漠然としすぎていますね。また、それ



神奈川会場
助川 未枝保 氏
(すげがわ・みほ)
(社)日本介護支援専門員協会副会長



神奈川会場 千葉会場
内田 千恵子 氏
(うちだ・ちえこ)
(社)日本介護福祉士会副会長

それぞれの専門性にもとづく留意点をあげてください。漠然とではなく、“人・モノ・環境”をできるだけ具体的にあ

げること」というアドバイスがあった。

新人は、「危険がないか確認して」と言われても何をどうしたらいいかわからない。「〇〇という危険があるから△△のことを確認して」というような具体的な説明が必要だ。多くは、自然に行っているはずだが、この演習ではそれをあえて意識的に行う。

◇専門性を活かし加速する議論の場◇

演習Ⅰと同様、両会場とも活発なディスカッションが行われた。特に各専門職同士の意見出しでは、日頃の仕事の進め方の違いからも新たな“気づき”で盛り上がる場面が見られた。

「異なった分野の専門職がお互いの“気づき”を話し合い、情報を共有できたということ、これは非常に大きい収穫だったと思います」（助川氏）。

「今の介護は自立支援ではなく“お世話型”介護になっていて、批判をあびることもあります。ヘルパーさんが来ない時にもご自分で何とかできるような工夫が必要。そういったことも頭に入れて提案などしていけるといいと思います。介護に“これが正解”とか“このやり方しかない”ということはありませんので。本当に皆さん多くの危険に気がつき、大変有意義だったと思います」（内田氏）。

*参加者の感想は…

- ・個別サービス計画については、(仕事が増えるのはいやだけど)、福祉用具の導入時から関わられるのはうれしい(訪問介護員:サービス提供責任者)
- ・業務では生活レベルのことには関わらないので、ヘルパーさん・ご利用者さんの「使い勝手」などリアルな意見が聞けたのは新鮮だった(福祉用具専門相談員)

